

# 中学女子バレーボール指導者の指導実践の描出と 選手としての葛藤についての事例的検討

—エピソード記述と語り合い法を手掛かりに—

野口将秀\*, 遠藤俊郎\*\*, 鳥羽賢二\*\*\*, 宮内一三\*\*\*\*, 内田和寿\*\*\*\*, 中嶋大輔\*\*\*\*\*

A case study of coaching in a junior high school women's volleyball team  
and conflict as a player

— Using the episode description and the in – depth talking –

Masahide Noguchi\*, Toshiro Endo\*\*, Kenji Toriba\*\*\*, Ichizou Miyauchi\*\*\*\*,  
Kazutoshi Uchida\*\*\*\*, Daisuke Nakajima\*\*\*\*\*

## Abstract

The purpose of this study was to present a case study of practical coaching through scientific investigation of what is happening in the field, and to clarify the hardships faced by a coach. The episode description and the in – depth talking, one of the qualitative research methods, were used. The study's subjects were a junior high school women's volleyball team and their coach.

After conducting observation, three characteristic instruction methods were identified: "how to talk attract many players," "how to scold for the team to one," and "how to encourage mentality as an ace spiker." Furthermore, it was suggested that the conflict of a coach was a fundamentally ambiguous. Finally, the study revealed that underlying the coaching was a regard for the importance of the relationship between players.

Key Words : qualitative research, participating observation, relationship

キーワード : 質的研究, 関与観察, 関係性

## 1. 緒 言

コーチングとはすなわち、実践の学である。それは、「コーチングに関する多様な判断は、科学的研究成果あるいは『コーチ学』的研究によって生まれるものではなく、むしろコーチング実践の過程において産出される」<sup>37)</sup> といった論を待たずとも、もはや自明のものであろう。従来の自然科学における客観主義的な方法論は、古くはポランニー<sup>18)</sup>を引用しながら発見的パラダイムと経験知の必要性を主張したRainer<sup>29,30)</sup>によって批判されており、近年では新保<sup>32)</sup>によって科学の知が見直されるとともに、客観的であることのみが科学であるといったパラダイムを脱し、我々自身の経験のうちに学知を見出すことの重要性が語られるようになってきた。すなわち、スポーツの指導実践現場で行われている生きた経験の中に、学問が追及すべき領野が広がっているといえるのである。

これまでにも、多くの指導者が、自身のコーチング実践において得た経験知を学術的知見へと昇華させることを試みてきた。技術指導に関しては、スポーツ運動学<sup>9)</sup>を理論的背景

とした<sup>23)</sup>中村や三上<sup>20)</sup>、さらには岡端<sup>25)</sup>によってなされた、学習者の「動感」の地平に寄り添う研究や、「身体的メタ認知」という行為に基づき学習者自身が自らの動きの言語化を試みることによる学習の促進について検討した諏訪・西山<sup>33)</sup>、石原・諏訪<sup>8)</sup>といった研究が挙げられる。また、戦術指導に関しては、ハンドボールにおける戦術指導を事例的に扱った平岡ほか<sup>6)</sup>や會田・船木<sup>1)</sup>、バレーボールにおける戦術指導を事例的に扱った吉田<sup>36)</sup>、米沢・今丸<sup>35)</sup>などが挙げられる。さらに、球技におけるチームづくりに関しては、大学女子ソフトボールのチームマネジメントを事例的に検討した二瓶・桑原<sup>24)</sup>や、大学女子バレーボールにおいて自身が指導するチームの一年間を通した取り組みを反省的に考察した今丸<sup>7)</sup>、公式戦の敗戦に対する自身の指導の省察を論じた箕輪<sup>21)</sup>といった研究が挙げられる。さらに東海林<sup>34)</sup>は、自身の指導実践の省察も含めた「望ましいコーチングの獲得に向けたプロセス」の仮説としてARAPモデルを提唱し、指導者が熟達していく過程を構造的に明らかにしようとしているが、そうした構造を明らかにしていくためにも、個別具体的な多くの事例を積み重ねていく必要があると指摘している。また朝岡<sup>3)</sup>はコーチング学について、一般理論の昇華を前提として、体系化された個別のスポーツ種目の指導理論を確立することの重要性を指摘している。こうしたことから、個別具体的な指導実践を描出し、それらを検討することを通して、バレーボール種目における指導理論の体系化の一助に資するような研究が求められていると考えられる。

また、そうした個別具体的な事例に丁寧に向き合っていく中で

\* 京都大学大学院

Kyoto University Graduate School of Human and Environmental Studies

\*\* 大東文化大学 Daito Bunka University

\*\*\* びわこ成蹊スポーツ大学 Biwako Seikei Sport College

\*\*\*\* 大阪大谷大学 Osaka Ohtani University

\*\*\*\*\* 京都光華女子大学 Kyoto Koka Women's University

\*\*\*\*\* 京都外国語大学 Kyoto University of Foreign Studies

(受付日: 2015年3月19日、受理日: 2015年5月25日)

必要な視点として、その指導を行っている指導者も、葛藤を抱いている<sup>11)</sup>一人の人間存在であるということが挙げられよう。これまでの対人葛藤研究では、問題の解決を目的としたものが多く、葛藤の実体に迫ることが出来ていない<sup>5)</sup>とされていたが、小谷・中込<sup>12)</sup>は葛藤体験に積極的意味を見出し、指導者が葛藤を抱く中で「何に悩み、どのように向き合っているのか」という指導者個人内の体験(内的体験)についての理解を深める試み<sup>13)</sup>がなされている。さらに、指導者は多くの場合、その競技の競技者であったと考えられる。そうした意味では、その指導観には、指導者としての葛藤のみならず、競技者としての葛藤や挫折といった経験が多分に含み込まれていると考えることができる。江田・中込<sup>4)</sup>は、競技者の内的自己の発達を伴った自己形成(自己形成)について、自身の競技経験をもとに身体と対話を行う「対話的競技体験」の重要性を示唆しているが、指導者としてのみならず競技者としてのありようをも含め、一人の人間存在としての指導者のありように迫っていくという視座も求められるのではないだろうか。

そこで本研究では、実際の指導実践を現場から生き生きと描き出すために「エピソード記述」法<sup>15)</sup>を、また、指導者の人間存在のありようとその葛藤に迫るために「語り合い」法<sup>28)</sup>をそれぞれ用いることとした。これらの方法論は、統計的手法によって有意差を求めることで客観性を担保するという自然科学的な科学観に基づいた量的研究とは異なり、調査協力者の個々具体的に調査者の代替不可能性を前提として迫ってゆく人間科学的な科学観に基づいた質的研究と呼ばれるものである。

エピソード記述とは、発達心理学者である鯨岡<sup>14)</sup>が、外部観測的な客観性を追究する自然科学の影響を受けた現在の心理学の在り方に疑問を呈し、とりわけ保育の現場を中心として「人と人の接面ではいったい何が起きているのか」<sup>17)</sup>という素朴な問いに対する答えを求めて現場に入り、「関与観察」を行う中で構築した方法論である。この方法論では観察者は、それまでの客観主義とは異なり、無色透明で代替可能な存在であるとは考えられていない。精神科医のサリヴァン<sup>31)</sup>が提唱した「関与しながらの観察(participating observation)」に着想を得たこの「関与観察」は、「両義的な欲望を抱え、同型性(共通性)と固有性(独自性)を携えた主体として生きる研究者が、自ら人の生きる場に身を挺して、その接面において感じられるもの、得られる気づきをエピソードに描き、あるいは協力者の語りを切り取って、その意味を掘り下げること」<sup>17)</sup>が念頭されているのである。この際、切り取られるエピソードは、関与観察者である当事者がその現場で出会った「人と人の接面に生じた出来事についての意識体験」<sup>17)</sup>である。もちろんこうして切り取られるエピソードはそれ単体として提示されるものではなく、「まずその意識体験が起こる舞台として〈背景〉を読み手に伝え、書き手の心揺さぶられた様をエピソードに綴り、そして書き手が心揺さぶられた理由を〈考察=メタ観察〉のかたちで添えて、読み手に対して私の心揺さぶられた意識体験を分かってほしいと伝える」<sup>17)</sup>ものであり、エピソード記述とは、〈背景〉〈エピソード〉〈考察=メタ観察〉という3点によって構成されるものであると

言える。このように、エピソード記述は現場の体験事象への接近を可能にすると同時に、それらを事後的に俯瞰して考察することが可能な方法論であると言える。

また、極めて現場の事象に即したこの方法は、「エピソード記述は体験の『意味』へと向かい、新たな問いを立ち上げ、他者と『意味』を共有することへと向かう」<sup>15)</sup>ことが目指されている。會田<sup>2)</sup>はコーチングに関する実践の経験事例を他者と共有してゆくことの意義を指摘しており、そうした意味でもエピソード記述は、実践事象から学知を描出し、それらを共有していくのに適した方法論であると考えられる。

語り合い法とは、同じく発達心理学者である大倉<sup>28)</sup>が、青年期のアイデンティティをめぐる問題を扱う際、既存の理論的枠組みで解釈を加えていくのではなく、まずはきちんと素朴にその人に「つきあってみる」ことを通して、その人のありようや独特の「感じ」に迫るために考案した方法論である。この「語り合い」法が通常のインタビューと異なる点として、単なる逐語録の字面の分析に留まらない、という点が挙げられる。「私たちのメッセージは、言葉で伝えることができないものを、あとに残す。そしてそれがきちんと伝わるかどうかは、受け手が、言葉として伝え得なかった内容を発見できるかどうかにかかっている」<sup>18)</sup>とされているように、言語を通じて聞き手が話し手の意図を「了解」する場合、その全てを十全に受け取ることは出来ないという限界がある。しかしまた、大倉<sup>28)</sup>がメルロポンティ<sup>19)</sup>を引用し、「所作の了解とは、他者の所作と私の内的可能性との相互性、もっと言えば、私の側のある行為(能動性)との相互性があった時のみ起こる。他者の所作は、ある指向対象を『点描によって描き出して』おり、私の身体能力がその対象に調節され、それと重なるときにのみ、他者の意図が十分に了解される。まずもって、私は私の身体によってこそ、他者を了解するのである。」としているように、話し手の意図がこちらの身体に、言語以上の納得性や独特の感じをもって伝わってくることもある。それらは、「間主観性」、あるいは「間身体性」とされているもので、我々人間の日常的なやり取りや基本的なコミュニケーションの根底にある身体性である。このように、話し手への理解を言語的側面のみ限定せず、身体を携えてその場に臨む聞き手に間主観的・間身体的に感じられたものをも考察の対象にしている点がこの方法論の特徴である。

よって本研究では上記の二つの方法論の援用を通して、指導実践の詳細かつ力動感を伴った現実性(アクチュアリティ)<sup>28)</sup>を描出すると同時に、一人の人間存在としての指導者が抱える葛藤や競技経験を捨象することなく丁寧に検討し、他の指導者の学びに資する一考察を提示することを目的とした。なお本研究は、量的研究が主張するような、統計的有意差といった客観性の担保によって普遍性に資するという観点ではなく、「普遍性というよりは公共性という意味での一般性」<sup>15)</sup>を念頭している。そのため、ここで見出した指導の観点が、普遍的に妥当するかという点に言及することはできない。客観的でなければ科学ではない、という観点しか持たなければ、こうした研究はいつま

でも単なる報告書の域を出ることはできないという現状はあるが、本研究ではそうした危惧や哲学的な議論は措くこととし、事例の「納得性」や「遍事象の真理」<sup>26)</sup>といった点に主眼を置いて考察を進めたい。

## II. 方 法

本研究は、エピソード記述<sup>15),16),17)</sup>および、「語り合い」法<sup>26),27),28)</sup>を用いた。

エピソード記述は、当該場面の「背景」、実際の「エピソード」、そしてそのエピソードのメタ意味を見出してゆく「考察＝メタ観察」という3つの過程を経る。なお、本研究における「エピソード」が見出された場面は、本研究者が「関与観察」を行っていたA中学校女子バレーボール部における20XX年7月から12月までのS(当時25歳)の指導実践に関してであった。関与観察は、2時間程度の練習を週3回行い、主要な大会にも2度帯同した。関与観察にあたっては、日々のSの指導実践の中で重要であると考えられるような出来事や雑感などを、主にその日のうちに想起してメモするなどして継続的に書き留めた。後日、表現などに留意しながらエピソードとしてまとめ、さらにそれに「考察＝メタ観察」を付すことで、一つのエピソード記述として成立するものへとまとめていった。

また、Sとの「語り合い」は研究の趣旨の理解と協力の承諾を得たうえでICレコーダーによって録音し、分析はその録音とそれを文字化したものによって当時の様子を想起しながら行った。協力者の選定にあたっては、「語り合い」法が、調査者の身近な人間で、自己を開示してくれる信頼性における友人を選定していることを参考に選定した。なお、Sは第一著者(以下では、著者はすべて第一著者とする)と同年齢であり、また同じチームに所属するチームメイトとして競技を継続していた競技者でもあったことなどから、本研究の協力者に適していると考えられると同時に、ラポールの形成も十分であったと考えられる。

人権擁護については、予め研究協力に対する同意(インフォームド・コンセント)を得た。また本論文中の学校名、人物名など個人が特定される可能性のあるものに関しては、人権擁護の観点から特定されない記号で表記するとともに、やり取りの中で不必要であると考えられる表現や発言に関しては慎重に吟味し、適宜修正を加えながら表記した。

## III. 事 例 の 提 示

### 1. エピソード記述によって描く指導者Sの指導

#### 1) 指導者Sについて

指導者Sは、中学校の社会科の教員として勤務する傍ら、部活動である女子バレーボール部を指導していた。また、S自身も現役のバレーボール選手として社会人チームに所属するなど、選手でありながら指導者でもあるという人物である。

先生として勤務中のSは、学校内を非常に堂々と毅然とした態度で闊歩する一方で、生徒たちにもいつも積極的に話しかけたりする気さくな一面を持ち合わせていた。生徒たちと比較的年が近いこともあってか、そういうときのSは「先生」というよりもどちらかといえば「先輩」のような感覚で生徒たちと接することも多かった。もちろん大事な場面ではきちんと叱るが、合唱祭や体育祭などは生徒と一緒に本気で取り組み、時に感極まって涙するなど、尊敬される一方で生徒たちからの信頼が非常に厚い先生でもあった。

### 2) A中学校女子バレーボール部について

そんなSが監督を務めるA中学校女子バレーボール部は、Sが指導するまでは過去その地区で殆んど勝ったことのない中学校であったが、指導をはじめて3年で地区準優勝の成績を収めるなどその中学校の女子バレー部の歴史を塗り替える快進撃を続けていた。このバレー部は、クラスのなかでも比較的くせのある生徒たちが集まっており、Sはよく冗談交じりに「ヤンチャ集団だね」などと話していた。

以下では、そんなA中学女子バレー部に半年間の参与観察を行った中で見出された、指導者Sの特徴的な指導のエピソードを3つ挙げていくこととする。

### エピソード①：「場の空気を作り出すSの集合」

#### 【背景】

それは私が、指導者Sの指導の関与観察を始めた初日のことであった。その日は、指導者Sの後について、選手がいる体育館に入った。

体育館の中からは、ボールの弾む音に加え、時折笑い声も聞こえてくる。指導者Sが、ガラリと扉を開けると、それに気づいた選手たちは、みんな一斉に「こんにちは」、「こんにちはー」と挨拶をする。その挨拶に対してSは、ゆっくりひとつ頷きながら、「はい、こんにちは」と返す。すでにそこには、普段生徒と談笑しているときの「S先生」の姿はない。椅子に座って靴紐を結ぶ間に、選手たちが集合し、全員が準備できたところでキャプテンの「お願いします」の号令に続いてみんなが「お願いします」と復唱する。その挨拶を受け、一度ゆっくりと全体を見渡し、一呼吸間を置いてから「はい、お願いします」といって話を始めた。やや緊張感のある空気を纏いながらも、時に立ち膝になり、選手たちと同じ目線で語り掛けるような口調で話をしていく。選手たちは、そのS先生の纏う空気に導かれるように一気に真剣な眼差しへと変わり、じっと彼の話に耳を傾けている。決して雄弁に振る舞っているわけではない語り口ながら、彼の語る言葉には、どこか聞いている人を納得させる力強さがあった。予め頭で用意していた言葉を誦んじるのではなく、その都度彼が伝えたいことが言葉となって紡がれている、とでも

形容できるだろうか。そうしたSの言葉をじっと聞きながら、チームが一つになっていくのを私は感じ取っていた。彼だけが話しているにもかかわらず、そこにチーム全体の対話と共通理解が生まれているような、そんな集合であった。

### 〈考察＝メタ観察〉

初めて目の当たりにした彼の集合では、その「間」の取り方がとても印象的であった。それは、まるで一つの演劇を演じているかのように、体育館に入って全体の前に姿を現した瞬間から始まっていた。もちろん彼の醸し出していた雰囲気は、威圧的であるとか、暴力的であるといった類のものではない。思わず惹き込まれてしまうような、真剣さや緊張感を纏ったSの「間」と語り口調は独特で、選手たちに「話に耳を傾ける準備」を促すものでもあったように感じられた。後にS自身によって語られることになるが、この雰囲気の切り替えというのは、Sにとってもある程度明確に意識されたものであったようである。いずれにしてもこの「選手を惹き込み、話を聞かせるカリスマ性」というのは、指導者Sの特徴的な側面であったといえるであろう。

### エピソード②：「ひとりにすんなや」

#### 【背景】

以下のエピソードは、関与観察を始めてから2週間ほど経過した、ある日の練習でのことである。キャプテンを中心に、お互いが協力し合ってみんなで創っていき、というようなことをテーマに掲げて取り組んでいた折のことであった。その日、指導者Sは学校業務のため、少し遅れて体育館に来ることになった。エピソードとして取り上げるのは、Sが体育館に入ってすぐの出来事である。

少し遅れて体育館に入った指導者Sであったが、この日は暑さのせいもあってか選手たちの「こんにちは」のあいさつの声も小さくまばらで、Sと一緒に体育館に入った私は、みんないつもより集中してないな、と感じていた。いつものように悠然と靴紐を結びながら練習を見渡し、選手たちが集合してくるのを待つS。普段からSと談笑することも多かった私は、体育館では彼の作る空気感そのものも含めて邪魔をしないようにと静観しつつも、この集中力を欠いた選手たちの状況をどうするのかと注目していた。

練習の途中で監督が来た場合は、区切りのいいところまで練習を進め、その後にキャプテンが号令をかけて集合するという決まりになっている。この時は2人組でパスのメニューをしており、これもキャプテンNの号令で進めていた。指導者Sが来たことで少し真剣さが増した選手も数人はいたが、上級生でチーム一のお調子者のHや、真面目な部分も持っているがよくHの空気に流されてしまうTなどは、ま

るで休み時間に遊んでいるときのような雰囲気でおしゃべりをしながら練習をしていた。しっかりと取り組んでいるときは大きな声を出して積極的に取り組み、チームをいい方向に引っ張っていく影響力を持っている2人であるが、このときは逆の影響を及ぼしていた。その周りにいた選手たちにもその空気は伝播しており、キャプテンの号令にも復唱せず、全体としてまとまりのない集中力を欠いた空気が漂っていた。キャプテンのNはその練習の雰囲気を良くないと感じているようであり、また自分の号令に復唱してくれない周りに対して何か言おうと周囲を見渡してしばらく逡巡していたが、その後も何も言えないまま黙々とパス練習を続けていた。

パス練習が一通り終わり、S先生に集合するためにキャプテンのNが、「集合ー」と全体に声をかけた。数人の「集合でーす」という小さな復唱と、HやTの笑い声とともに、ばらばらとS先生のもとへ集まってくる。全体で「お願いします」とあいさつをすると、S先生が開口一番、ゆっくりと、しかし決然とした口調で「お前らこれ、どういうことだ?」と問い掛けた。その後、沈黙が訪れる。先ほどまでふざけていたHやTも含め、全員がそのS先生の空気感を感じ取り、一気に真剣な表情になってじっとSを見つめた。全体を見渡し、一人一人の表情を確認しながらも、じっと押し黙っているS。選手一人一人が、先ほどまでの自分たちの雰囲気や練習への取り組みを反芻し、少し気まずい表情をしている選手もいる。たっぷりと「間」を取ったのち、S先生は、「こんなのが俺らのやりたいバレーちゃうやろ?」と語り始めた。「なんやねん、この練習の雰囲気。それと、俺が一番気に食わんのは、復唱や。(キャプテンのNを指して)こいつが、ずっと声掛けてるやろ、『次アンダー10本でーす』とか。それは、みんなのために言うてんねん。けど、みんな全然復唱してない。そなん、無視と一緒にやろ。こいつをひとりにすんなや!」

そしてまた、沈黙が続いた。その言葉に、責任を感じつつもどこか安堵しているような複雑な表情を浮かべるキャプテンNや、自分たちのことを言われていると察して少しうつむき加減のHやT、自分たちにもその非があると感じ取っている様子である他の選手たちなど、全員がじっと指導者Sの言葉に耳を傾けていた。そしてSは、「俺に怒られてやったって意味ないねん。みんなで作るチームなのに、誰かのやってることに対してみんながそんな態度だったら、絶対いいチームになんかならんで。」と続け、集合を終えた。

その後の練習では、選手たちはいつも以上にしっかりと復唱をし、声を出して雰囲気を作り、質の高い練習環境を積極的に創り出していった。なにより、

怒られた…といった気まずい雰囲気や、指摘されたからいやいややるといった後味の悪い雰囲気は微塵もなく、全員が自発的に前向きな気持ちで練習に臨めるようになっていた様に、私は感じ入っていた。

### 〈考察＝メタ観察〉

この集合で出来ていた空気感は、何とも言えずぐっとまとまりのある、密度の濃い空気感じられた。誰もが納得して、Sの話を聞いていた。それは、適切な練習環境が創られていなかったことをふざけていた数人のせいにするのではなく、「こいつをひとりにすんなや！」と、全員に責任があったのだという当事者意識を持たせて自覚させていたことや、単なる糾弾で終わるのではなく、チームとして納得のいく在り方を示していたために生まれたものだったのではないだろうか。全体の前でSが語った「キャプテンNをひとりにするな」というメッセージは、今回の復唱の小ささや練習の集中力のなさといった指摘に限局されるものではなく、チームの共通認識として持ってほしいとSが願っている「みんなで創っていくチーム」という一つの哲学の表明だったのであり、それを選手たちが感じ取って納得していたからこそそうした空気感が生まれていたのかもしれない。そうした「チームを一つにする叱り方」が、Sの特徴的な指導の一側面であったといえるであろう。

また、今回取り上げたエピソードに限らず、そうした「チームみんなで」という哲学に基づいた指導的な関わりは、随所に見受けられた。そのようなSの終始一貫した姿勢を選手たちは感じ取っているようで、軸のぶれない指導であるという点も、選手たちがSに信頼を寄せる理由の一つになっているようであった。

### エピソード③：「エースの心構え」

#### 【背景】

以下のエピソードは、地区大会が目前に迫ったある日の練習での、エースKに対する指導的関わりを取り上げたものである。Kは絶対的な実力を持っているというわけではないが、エーススパイカーとして監督やチームから期待を受ける選手である。試合を想定したチーム練習で、なかなかいいスパイクを打つことが出来ず、弱気になっているKに対して指導的関わりをしていたのが、以下の場面である。

試合を想定した練習で、なかなかいいスパイクが決まらないK。自分がなんとかしなければ、という気持ちは伝わってくるものの、なかなか結果としていいプレーに繋がらない。思うようにいかないKの目に諦めの色が滲み始めたとき、それまで静かに状況を見守っていた指導者Sが立ち上がり、「そこでお前が強気でやらなくてどうすんねん！」と強い口調で語り掛けた。Kの様子に心配そうな表情だった周囲の選手たちも、じっと指導者Sの言葉に耳を傾ける。「こう

いう時にデカイ声出して呼んで、打ちに行くのがエースやろ！チームの信頼背負ってるから、お前にトスが上がってくるんやろ！」と厳しい口調で語り掛ける指導者Sの言葉に、少し涙目になりながらも頷くK。そんなKと、そしてチーム全体に訴え掛けるように、「みんなが必死で拾って繋いだボールを、お前が決めるんや。それなのに、お前がそんな弱気になってどうすんねん！みんなの想いも背負って、打ちに行くんがエースやろ！」と続けたのであった。エースとしての心構えを訴える厳しい言葉と、チームみんなで戦っていこうというメッセージの込められた言葉に、Kだけでなくチーム全体が鼓舞されていた。その後、積極的にトスを呼ぶKの必死な姿と同時に、なんとかしてKに繋ごうという他の選手の気持ちの入った一体感のあるプレーが、とても印象的であった。

### 〈考察＝メタ観察〉

この時のSの、苦しい局面や大事な場面でトスが上がってくるエースKに対する厳しい言葉掛けのなかにも、Sなりの指導哲学が垣間見える。苦しい状況に立たされ、弱気になりそうなKに対して、エースとしての心構えを説くS。そこには恐らく、Sが「エーススパイカーに求める勝負強さ」が根底にあり、それをKにも身に付けてほしいという願いが込められているのであろう。そして、それは決してKだけに向けられたものではなく、チーム全体に向けられたものでもあったようである。スパイクが決まらないKに対して、あえて全体の前でエースの心構えを引き合いに出しながら叱咤激励することで、「スパイクが決まらないK」としてではなく、「スパイクが決まらないながらも、エースとしての責任を必死で全うしようとしているK」としてKの存在を立ち上げさせ、それによってチームと融合させるという図式が出来上がっていたと考えられるということである。すなわち、「スパイクが決まらなくて苦しんでいるKは、自分たちが繋いだボールを決められなくて自分たちの代表として厳しく言われているんだ」、という当事者意識が他の選手たちの中に芽生え、みんなで繋いでKに持っていこう、という意識や、周りで見ている他の選手も含めてチーム全員が、Kを心から応援するという空気感が創り出されていたといえるのではないだろうか。SがエースのKに叱咤激励をすることを通して、一人が苦しんでいることに対してチームの全員が当事者意識を感じる、というような「お互いが協力し合ってみんで創る」チーム文化を育む結果となっていることがうかがえるのである。

## 2. 「エピソード」のまとめ

ここまでSの指導のありようを、3つのエピソードを通して、現場の質感とともに描出してきた。エピソード①：「場の空気を作り出すSの集合」では、Sの独特の空気感や「間」の取り方、カリスマ性のようなものが特徴として挙げられた。また、エピソード②：「ひとりにすんなや」では、

単に叱責するのではなく、「みんなで創っていくチーム」という一つの指導哲学の表明へとつながっていたことがうかがえた。そして、エピソード③：「エースの心構え」では、なかなかエースとして力を発揮することが出来ない選手に対して、自らトスを呼んで積極的に打ちにいく姿勢を求めると同時に、そのチームメイトを他の選手全員で支えていこうという雰囲気をチームにもたらしものとなっていた。

さて、ここまで、指導者Sの特徴的な指導のありようを、3つのエピソードとともに描出し考察してきた。ここからは、そうした指導の根底にある、Sという人物とその葛藤に迫ってゆくと同時に、彼の指導との関連を見出し、等身大の指導のありようを見つめていくこととした。

以下では、ある日の試合でのエピソードと、その後の著者とSとの「語り合い」<sup>28)</sup>を見てゆくこととする。

### 3. 「エピソード記述」法および「語り合い」法によって描く、Sという人物とその葛藤

#### 1) Sと著者との関係と、「指導者としてのS」

Sは著者と同じ年であり、彼と著者との最初の出会いはある社会人チームのチームメイトとして、であった。彼はそのチームでスーパーエース(オポジット)と呼ばれるポジションであり、スパイク力はチーム随一、同じディビジョンの他チームと比較しても全国で1,2を争うほどの強力なスパイカーであった。そんな彼には、チームが苦しい状況ではいつもトスが集まるというように、名実ともにチームの柱でありエースであった。Sは高校時代、全国大会に出場するような実績は残せなかったものの、身体能力を買われて強豪大学に進学し、社会人チームに所属してから頭角を現した選手でもある。

著者が出会ったチームメイトとしてのSは、普段からとても愛想がよく、自ら周囲に対して心を開いていつも会話の輪の中心にいるような人物で、周囲からも好感を持たれていた。Sが普段教員をしているということを実際に見たことのない他のチームメイトからは、「お前に先生なんかできるのか？」と冗談交じりに揶揄されるほど、「先生」という真面目なイメージには似つかわしくない人物にも見えた。そういうSを最初に見ていた著者は、中学校での「指導者としてのS」の姿を最初に見たときには、「こんなにも変わるものなのか…」と驚いたものであった。「オンオフの切り替えが大事やろ」といつか話していたように、彼の中では、指導者の時の自分とそうでない時の自分というものを、自覚的にうまく使い分けているようであった。その意味では、中学校にいるときの彼は、「努力して作り上げた理想的な指導者像を頑張って演じている」といった見方ができるかもしれない。上述のエピソードで取り上げたように、彼の指導は、ある種非常に理想なこと、きれいなことを真摯に語っている印象がある。冷静に聞いたら少し気恥ずかしくなってしまうようなことでも、「指導者としてのS」はそれを堂々と語る事ができる。以前、著者がそれに言及すると、「普段の俺はええねん。こいつら(選

手達)の前では、こういう俺でおらなあかんねん。こいつらの前でだけ、そういう人間であればええねん。」と冗談交じりに語っていたこともあった。この言葉を聞いたとき、一方では納得しつつも、なんとなく釈然としないものを感じていた覚えがある。それは恐らく、指導者や先生というのはどうしても完璧さを求められる立場なのだろうという納得の一方で、S自身の生き方を多少置き去りにしてしまっているような印象を抱いたからであろう。では、私が「置き去りにしてしまっている」と感じたSに関して、「選手としてのS」という面から検討していくこととする。

#### 2) 「選手としてのS」

前述したように、私が彼の所属するチームに入団した時、彼はすでにそのチームの絶対的なエースであった。チームからの信頼も厚く、勝負所では必ずと言っていいほど彼にトスが集まるというように、エースポジションならではの重責を担っていてもいた。彼の選手としてのプレースタイルは、努めて明るく振る舞って周囲を元気付ける声掛けをするなど、「みんなで頑張ろう」という姿勢で試合に臨むことが多い選手であった。試合の途中で少しチームが苦しい場面では、「俺にもってこい！」と何度かチームを救う場面があった。Sは、「俺はみんなと協力して、全員で勝っていくってバレーがしたいねん」とよく語っていた。チームの雰囲気が緩んでいたら厳しい声掛けをするなど、選手でありながらも指導者のような目線でチームを俯瞰しているところもあり、中心選手としての役割を担っていたともいえるであろう。

しかしそうした一方で、最後の土壇場の場面でスパイクを決めきれないという、勝負弱さを指摘されていた側面もあった。終盤の競った局面で、彼にボールが集まることが多いため、彼がその一本を決められるか否かでチームの勝敗が決まってくる。その勝負所のボールを、Sがアウトにして試合終了、というのがチームの負けパターンであった。その局面に最初に出会ったのは、著者がチームに合流してしばらくした頃の公式戦、実力の拮抗した強敵との試合の時のことである。

#### エピソード：「独りで戦うSの姿」

##### 【背景】

その試合は途中まではいい雰囲気で進んでいたが、終盤まで接戦が続き、徐々に劣勢に傾いていく展開であった。チームメイトとして同じコートでプレーをする著者であったが、以下はその試合で印象的であったSのありようである。

強豪チームとの対戦で試合は白熱し、一進一退の攻防が続いていた。序盤は大きな声を出して味方を鼓舞していたSであったが、試合が進むにつれて徐々に寡黙になり、最終セットに入ってからタイムアウトでベンチに戻った時も、誰とも言葉を交わそうとせずに独りの世界に入っていた。彼はじっと押し黙ったまま、



寡黙な中でも痛いほどの緊張感や、何か重たいものを背負っているような陰鬱とした空気を纏っていた。いつものことなのか、そんなSに気を遣って、暗黙の了解のような様子で周囲のチームメイトは誰も彼に声を掛けていなかった。私も周囲の様子から察し、それが彼なりの集中の仕方なのだろうと捉え、あえてSに話しかけるといったことはせずに試合に集中することにした。

試合は最終セットの終盤までもつれ、やはりエース同士の打ち合いの展開になる。一点を争う特有の緊張感の中で、こちらも精一杯の奮闘を見せていたが、相手に先にマッチポイントを握られる。そして試合の勝敗を分ける重要なボールが、彼に託される。必死でチームの期待を背負い、寡黙にプレーする彼が最後に打ったボールは、無情にも大きくコートの外にアウトして試合終了となったのであった。

### 〈考察＝メタ観察〉

この試合が、著者が初めて目の当たりにした、このチームの負けパターンであった。印象的だったのは、余裕がある序盤の局面でのSの雰囲気と、試合が進むにつれて寡黙になっていく彼の空気感の変化であった。もちろん、重要な局面を何度も託されるSが感じていた重圧は、相当のものがあつたであろう。しかし、疑問が残っていた。それは、中学生を指導するときに、エースのKにあれほど訴えていた、「苦しい時こそトスを呼んで打ちに行く」という姿が見られなかったからである。あれほどKにエースとしての心構えを説いていたSが、それと反して寡黙になっていく様を見て、純粹に彼に話を聞きたいと感じた。その時、彼はどのような気持ちで試合に臨み、どのような葛藤を抱えていたのだろうか。その時の「語り合い」が、以下に示すものである。

語り合い：

「自分に言い聞かせてるようなもんかもしれんなあ…」

(敗戦後の重苦しい空気の中、努めて明るく、その日の試合のことについて切り出した)

著：今日はお疲れ。どうだった？今日の試合は、

S：ん？…ああ、俺のせいやな。

俺が勝負所で打ち切れん。…それだけや。

(きっぱりと言い放つSだったが、その表情は物憂げである。)

著：まあ…あれだけ最後S頼みの配球になればな…そりゃ誰だってキツイだろうとは思うけどな。まあもちろん、それだけチームの信頼が厚いってことではあるんだろうけど。

S：…結局いつもそうや。あの人たち(チームのメンバー)は、頼る人間を間違えてんねん。

著：ん？

S：俺なんか、そんな強い選手ちゃうしな。毎回お

んなじこと繰り返してる。お人よしや、あのチームは。

著：まあ…強さって何なのかっていうのは、難しい問題ではあるなあと思うんだけど…。

(「強さ」ということに関して、一つ一つ積み重ねていくことの重要性を引き合いに出したSは、自分はきちんと勉強をしてこなかったという後悔を語る)

S：俺のは、「メッキ」や。嫌なことからは、逃げてきてんねん。

(Sの「メッキ」という言葉に、指導者としてのSが抱える不安や葛藤との関連を感じ、そのことを引き合いに出す著者。)

S：あー、あれ(指導者としてのS)も…まあ一緒やな。「メッキ」に過ぎん。なんていうか…向き合わなあかん…頭ではわかってるんやけど、なんか、向き合ってきてないねん。だから、いつまでも「メッキ」のまんま、っていうか…。

著：んー…まあ強さって…わからん。ある面では「メッキ」な部分もあるんじゃないかと思うけど…。例えば今日の試合の、終盤以降のあの寡黙な感じも、「メッキ」？独りになってるっていうか、独りの世界に入るっていうか。

S：ああ…。んー…、独りになってるつもりはないねんけどなあ…いろいろと考えてしまうんよね。そう映った？

著：まあ、ね。周りも声掛けてなかったから、いつものことなのかな、と。それに、そうやって自分を作ってるのかなって。

S：いっつも…なってるかもなあ。終盤になると、もう結局エース勝負やん、うちのチームって。そうすると、どうしても、「俺が打たなあかん」って思いすぎるといふか…。

著：まあ、それがエースの重圧なんだろうね。

S：そう、エースの重圧。

著：ふむ。

S：怖くてしゃーないねんなあ…必死で強がってるんやけど。

著：(やや冗談交じりに)それこそ、いっつも指導の時に言ってるよね、「こんな時にお前が強気で打たんでどうすんねん！」ってさ。

S：ああ…あれ。

…自分に言い聞かせてるようなもんかもしれんなあ…。

(話は流れて)

著：そういえば、この前中学生の話でも出たけどさ、全員バレーっていうか、みんなで作っていくバ

レーの話、あれ、今日のチームではできてたと思う？

S：んー…ある程度はできてるんちゃうかなとは思うけどな、

著：ふむふむ。

S：けど結局、独りになってるように見えたって言われてるってことは、できてないんやろなあ…。

著：あーまあそれは…。俺らが頼りないから、とかもあるだろうけどなあ。

S：いや、そういうわけじゃない。みんなのところに飛び込んでいきたいし、頼りたい。頼りたいけど…結局最後は独りやねん。どんなに全員バレーがいいって言っても、俺が打てるかどうかは…俺が自分と戦わなあかんねん…。

著：なるほどねえ…。

#### 〈考察＝メタ観察〉

彼との会話で、Sがここまで自分のことを語ってくれたのは、恐らくこの時が初めてであったように思う。エースとして、チームの敗北の責任を一身に感じている彼は、傷心を抱えながらも自らの不甲斐なさについて語ってゆく。そんな彼を見て、抱え込みすぎなのでは…と思いつォローを入れるが、自分は強くない、ときっぱりと断言する。彼は自分について、これまで勉強などをきちんとやっとなかったことを引き合いに出して、「俺のはメッキや。嫌なことからは、逃げてきてんねん。」と語った。彼の言う「メッキ」や「逃げてきてんねん」という言葉に込めた意味を、なんとなく分かるようで分からないこの時の私は戸惑いながらも、そこに彼の葛藤に迫る重要な何かがあるのではないかと感じていた。そうしたことをぼんやりと考えながらも、私は「メッキ」という言葉をキーワードに、中学校での彼の指導者としての在り方について、冗談のような軽い口調を作って言及した。以前から彼の指導の源泉を知りたいと考えていた私は、「メッキ」という言葉を聞いた際、以前Sが、「こいつら（指導する中学生）の前でだけ、そういう人間であればええねん。」と冗談交りに語っていた言葉を思い出し、なんとなく指導者としての彼が纏っているものに近いものを感じたからであった。すると彼は、「あれも…まあ一緒やな。メッキに過ぎん。」と言うのであった。

終盤の勝負所でどうしても打ち切れない自分に何度も直面するなかで、自分の成長の阻害要因を、勉強のようにコツコツと積み重ねるといった積み重ねや反省の足りなさにみえていたのであろうか。いずれにしても彼は、自ら語っているように「嫌なこと」から「逃げてしまう自分」に対して、どこかでは自覚しながらも、やはりどうしても向き合いきれていない自分を感じて苦しんでいたように見えたのである。

そこで話の矛先を、その日の彼の寡黙な感じについて向

けてみた。中学生への指導の中で、「ひとりにすんなや」とチームメイトを叱っていた彼だけに、試合中に独り寡黙に自分の世界に入っていくことに対して、どう捉えているのかを知りたかったからであった。すると彼は、「怖くてしゃーないねんなあ…必死で強がってるんやけど。」と、エースの重圧、終盤でいかにエースが孤独であるかという旨のことを絞出すように語ってくれた。私はまたも中学生への指導の場面を持ち出し、「(やや冗談交りに) それこそ、いっつも指導の時に言ってるよね、『こんな時にお前が強気で打んでどうすんねん!』ってさ。」とあえて軽い感じを作って質問したが、「…自分に言い聞かせてるようなもんかもしれなあ…」と、なお沈痛な面持ちで呟くように胸の内を語ったのであった。私は、彼が必死で葛藤している「選手としての自分」と「指導者としての自分」という自己矛盾のようなものを垣間見てしまったような気がして、それ以上話を続けることが躊躇われ、いったん話題を変えることとした。

その後、話は流れて、いいバレー、全員バレーのようなものができているかという話になった。中学生の指導にあたり、特に彼がこだわっていたのが、「全員で力を合わせる」といったことであった。そのようなバレーが体現できれば、それはなによりものすごくいいチームであると同時に、強いチームでもあるという考え方を彼は持っており、それについては私も、深く共感していた部分であった。それを、実際にお互いがプレーヤーとしてコートの中で表現できているかということは、これまでもしばしば議論を交わすことがあった。しかしその日の彼の様子は、やはりどこか独りで抱え込みすぎていて、まるで独りでバレーボールをしているようにも思えたので、私はそれについてどう考えているのか聞きたいと考えた。最初、ある程度そうしたバレーは体現できていると思うと答えながらも、「けど結局、独りになってるように見えたって言われてるってことは、できてないんやろなあ…」と静かに語りだす。個人としてパフォーマンスを発揮するためには、ある程度独りの世界に入っていくことも必要な要素ではないかといった議論も考えたが、それについて言及することはせず、むしろ「あーまあそれは…。俺らが頼りないから、とかはあるかもな。」と、あえて本音と冗談の入り混じった返答をした。それに対して彼は、「いや、そういうわけじゃない。みんなのところに飛び込んでいきたいし、頼りたい。頼りたいけど…結局最後は独りやねん。どんなに全員バレーがいいって言っても、俺が打てるかどうかは…俺が自分と戦わなあかんねん…」と、仲間とともに戦いたいという気持ちがありながらも、それでも最後は自分次第、自分と戦わなければならないのだという葛藤が伺えるようなことを語ったのであった。チームみんなで戦うことの重要性やエースとしての心構えを指導者として必死で中学生に訴える彼が、選手として抱えていた葛藤は、それが理想的だと感じつつも、自ら体現することができていない自分の姿にあったのかもしれない。



#### 4. 「語り合い」のまとめ

彼との一連の「語り合い」によって、一選手としての自らの在り方を見つめる彼の姿を通して見えてくるのは、彼の指導の根幹をなす部分だと言えるのではないだろうか。逆説的になるが、彼の指導の最も根幹の部分、例えば「ひとりにすんなよ」といった指導や、彼が必死にエーススパイカーに求めていた姿勢といった指導観は、彼が選手として達成することができていないものによって成り立っているということがいえるのかもしれない。

#### IV. 総合考察

本研究は、エピソード記述法および語り合い法を通じて、中学女子バレーボール部の指導者であり同時に競技者でもあるSの指導を描出するとともに、選手として抱いていた葛藤を明らかにしてきた。

Sの指導に関して総じていえることは、選手の気持ちをよく察し、選手の視点に近いところに視点を重ねていた、ということではないだろうか。そうした意味では、キャプテンの号令に復唱していなかった他のチームメイトに対して「ひとりにすんなよ」と訴えかける指導や、積極的に打ちにいく姿勢をエースに求めチームみんなで支える雰囲気を作ろうとする指導の根底には、その当事者の思いに寄り添い、チームメイト同士の「関係性」を重視する視座が存在していたと考えられる。東海林<sup>34)</sup>は5つのコーチングのアプローチがあるとしているが、なかでも「指導者の直接介入コーチング(quickコーチング)」と「自発的な協力関係を醸成するコーチング(slowコーチング)」を適切に取り入れながら選手間の協力関係を導くことが求められるとしているが、Sの指導は、直接の介入によって選手たちを先導していく「quickコーチング」と同時に、選手たちが力を合わせて協力する「関係性」を築いていくような「slowコーチング」も行っていたと考えられる。また鯨岡<sup>16)</sup>は発達心理学研究において、「子ども—養育者」関係を、相互主体的な関係と捉えており、「育てる」という営みを、あれこれの能力が子どもに定着するという個体能力発達の視点に限局するのではなく、子どもの「思い」を主体として受け止めることが必要であるとしている。そうした「子ども—養育者」関係という関係性全体をして、育てるという営みなのだと考えられているのであるが、Sの指導も、選手同士の協力関係の醸成と同時に、選手の置かれている状況やその気持ちを主体として受け止め、その思いを慮っていたからこそそのありようだったのではないかと考えられる。

さらにそうした指導観は、終盤の勝負所で打ちきれない自分自身と葛藤し、「対話的競技体験」<sup>4)</sup>を通して自己形成を模索する中で、孤独になってしまう自身のありようを払拭するための「関係性」の希求が根底にあったのではないかと考えられる。中込<sup>22)</sup>は、競技での危機と向き合い、その解決に取り組むことがその選手の人格発達に繋がるとしているが、Sが「頭ではわかってるんやけど、なんか、向き合ってきてないねん。だから、いつまでも「メッキ」のまんま、っていうか…」

と語っていたように、まさしくSはそうした重要な課題に直面し、葛藤していたことがうかがえる。指導者における葛藤<sup>13)</sup>や選手としての挫折<sup>10)</sup>、競技体験を内在化させる「対話的競技体験」<sup>4)</sup>などを扱った多くの研究において、それらの困難の先に肯定的な側面が見いだされることが指摘されていることから、Sにとっては選手として、また指導者としての「自己変革期 reformation of self」<sup>34)</sup>であったとも捉えられるかもしれない。そしてまた、彼が抱えていた葛藤は、鯨岡<sup>16)</sup>の主体の本質の考えに依拠するならば、根源的両義性によるものであると考えることができるかもしれない。鯨岡によると主体には、一方では周囲の人たちと共に生きることを喜びとする「整合希求性」という面と、他方ではどこまでも自分の思いを貫こうとする「自己充実欲求」という面とが存在し、バランスを保とうとするものの、なかなか両立しえないものであるがゆえに葛藤も生まれてくる、と考えられている。Sの抱えていた葛藤は、一方では周囲の選手と協力して勝利を目指すことを強く求めている反面、他方では自分独りの力でどうにかしなければならぬと苦悶するというように、根源的両義性の狭間で揺れ動きにあったといえるのではないだろうか。そのように選手として思い悩みながらも葛藤する等身大のSの姿から見えてくるのは、自身が達成できずにいる「関係性」を大切にしたいバレーボールを実現して欲しいという願いが込められた、指導のありようだといえるのかもしれない。

本研究は、中学校女子バレーボール指導者でもあり現役の選手としてプレーを続けるSの、指導のありようや抱えている葛藤について具体的に検討してきた。客観主義的な観察方法では、観察者が無色透明な存在として隔絶されることで代替可能性を担保しようとするが、そうした方法では協力者の一面的な行動の観察に終始してしまう可能性がある。それに対して本研究では、豊富なSの背景や描かれたエピソード、Sと調査者との深い内省の語り合いなど、調査者とSとの関係がなければ見出しえない、調査者の代替不可能性に根差されたものであったといえるであろう。そこでなされている考察は、メタ的な視点に立つ努力はなされているが、それは自然科学的な方法論によって完全な客観性を担保しようとするものでもなければ、それを志向するものでもない。むしろ、Sの指導実践や語りと向き合う調査者自身の視点を積極的に提示することで、より実際のありように近いもの、即ち本当の意味での事象の客観性に資するような描出が目指されていたのである。本研究で提示された結論や考察に、自身の現場での実践との類似点や相違点を感じ取った他の指導者などの読み手が何らかの考察を深めるのであれば、それは現場への貢献と実践に資する学術的研究の一つと考えることもできるのではないだろうか。

今後も、事例の少なさや個性ゆえの特殊性といった質的研究が抱える難点と向き合いながらも、こうした実践事例の詳細な記述や経験知の描出といった現場の知を、学術的価値を有する学知へと高めてゆく努力を続けていく必要があると考えられる。

## 引用・参考文献

- 1) 會田 宏・船木浩斗：ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究－大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに－，コーチング学研究，24 (2)，pp.107-118，2011
- 2) 會田 宏：コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方，コーチング学研究，27 (2)，pp.163-167，2014
- 3) 朝岡正雄：体育学におけるコーチングの役割，コーチング学研究，27 (1)，pp.1-7，2013
- 4) 江田香織・中込四郎：アスリートの自己形成における競技経験の内在化を促進する対話的競技体験，スポーツ心理学研究，39 (2)，pp.111-127，2012
- 5) 橋本 剛：ストレスサーとしての対人葛藤－ストレス低減方略への展望－，実験社会心理学研究，35 (2)，pp.185-193，1995
- 6) 平岡秀雄・田村修治・栗山雅倫：ハンドボールの戦術に関する事例研究－戦術の変更が攻撃に及ぼす影響－，東海大学紀要，35，pp.49-57，2006
- 7) 今丸好一郎：チームづくりに関する事例的研究－本学バレーボール部(6人制)の平成19・20年度における活動報告－，東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要，45，pp.107-115，2010
- 8) 石原 創・諏訪正樹：身体的メタ認知を通じた身体技の「指導」手法の開拓，身体知研究会(人工知能学会第2種研究会)SIG-SKL，09-03，pp.19-26，2011
- 9) 金子明友：スポーツ運動学－身体知の分析論－，明和出版，2009
- 10) 和秀俊・遠藤伸太郎・大石和男：スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程－男性中高生競技者の質的研究の観点から－，体育学研究，56，pp.89-103，2011
- 11) 小谷克彦・中込四郎：動部活動において指導者が遭遇する葛藤の特徴，スポーツ心理学研究，30 (1)，pp.33-46，2003
- 12) 小谷克彦・中込四郎：運動部指導者の葛藤生起パターンごとにみられる対人関係の中での自己知覚の特徴，スポーツ心理学研究，35 (2)，pp.1-14，2008
- 13) 小谷克彦・中込四郎：運動部活動における指導者の葛藤対処に伴う内的体験，スポーツ心理学研究，39 (1)，pp.15-29，2012
- 14) 鯨岡 峻：関係発達論の構築，ミネルヴァ書房，1999
- 15) 鯨岡 峻：エピソード記述入門－実践と質的研究のために－，東京大学出版会，2005
- 16) 鯨岡 峻：ひとがひとをわかるということ－間主観性と相互主体性－，ミネルヴァ書房，2006
- 17) 鯨岡 峻：なぜエピソード記述なのか－「接面」の心理学のために－，東京大学出版会，2013
- 18) マイケル・ボランニー：高橋勇夫訳：暗黙知の次元，ちくま学芸文庫，pp.20，2003
- 19) メルロ＝ポンティ：木田 元・滝浦静雄・竹内芳郎共訳：木田 元編：人間の科学と現象学，メルロ＝ポンティ・コレクション1，みすず書房，2001
- 20) 三上 肇：コツの自覚に関するモルフォロジー的考察，スポーツ運動学研究，16，pp.13-26，2003
- 21) 箕輪憲吾：大学女子バレーボールにおけるゲームの敗因に関する事例的研究，長崎国際大学論叢，10，pp.107-118，2010
- 22) 中込四郎：危機と人格形成－スポーツ競技者の同一性形成－，同和書院，1993
- 23) 中村 剛：運動指導における超越論的反省分析の重要性，スポーツ運動学研究，26，pp.13-27，2013
- 24) 二瓶雄樹・桑原康平：団体スポーツにおける個人を活かすチーム・マネジメント－C大学女子ソフトボール部の実践例－，スポーツパフォーマンス研究，4，pp.16-25，2012
- 25) 岡端 隆：スポーツ運動学における運動観察の方法に関するモルフォロジー的一考察，静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)，59，pp.41-52，2009
- 26) 大倉得史：拡散 diffusion－アイデンティティをめぐる，僕達は今－，ミネルヴァ書房，2002
- 27) 大倉得史：語り合う質的心理学－体験に寄り添う知を求めて－，ナカニシヤ出版，2008
- 28) 大倉得史：「語り合い」のアイデンティティ心理学，京都大学学術出版会，2011
- 29) Rainer Martens：About Smocks and Jocks，The Journal of Sport Psychology，1，pp.94-99，1979
- 30) Rainer Martens：Science, knowledge, and sport psychology，The Sport Psychologist，Vol 1 (1)，pp.29-55，1987
- 31) サリヴァン：中井久夫・山口隆訳：現代精神医学の概念，みすず書房，<Sullivan, H. S.：Conceptions of modern psychiatry. Norton：New York. 1953>，1982
- 32) 新保 淳：スポーツ科学の限界と可能性－科学論の視点から－，広島大学学術情報リポジトリ，博士学位論文，2009
- 33) 諏訪正樹・西山武繁：アスリートが「身体を考える」ことの意味，身体知研究会(人工知能学会第2種研究会)SIG-SKL，03-04，pp.19-24，2009
- 34) 東海林祐子・金子郁容：コーチングのジレンマとその解決モデルの提案－高校運動部の実践事例から導かれた仮説に基づく考察－コーチング学研究，28 (1)，pp.15-28，2014
- 35) 米沢利広・今丸好一郎：バレーボールにおける攻撃戦術に関する事例研究－センター・ライト攻撃で5割の打数と50%の決定率を目指して－，福岡大学スポーツ科学研究，44 (2)，pp.29-40，2014
- 36) 吉田敏明：バレーボールにおけるサーブプレッシュフォーメーションの変更に関する研究－5人W型及び4人N型から5人逆W型への移行－，スポーツ運動学研究，9，pp.29-41，1996
- 37) 吉田敏明：「コーチ学」の経緯と展望，びわこ成蹊スポーツ大学紀要，3，pp.7-14，2006